



えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

えど友

第86号
平成27年
(2015)
7-8

江戸東京博物館友の会会報

目次	竹内館長記念講演「浅草の今と昔を語る」…………… 1~2	友の会セミナー（「江島事件」と江戸歌舞伎）…………… 6
	第15回定期総会開催…………… 2	友の会セミナー「役者絵の成立と発展」…………… 7
	見学会（広重『名所江戸百景』周辺探訪-その12）…………… 3	見学会（『江戸名所図会』の挿絵で歩く江戸の町(2)）…………… 8
	えど友小路…………… 4~5	友の会特別観覧会「花燃ゆ」…………… 9
	会員からの投稿「旧東海道(日本橋~生麦)を探訪して、 「針塚・筆塚・包丁塚など」/えど友サークルだより/ 友の会めも	江戸博クリップ「江戸時代の洋犬」…………… 9
		江戸名所図会を歩く⑩ [日吉山王神社から清水坂]…………… 10
		催事案内/会員優待のお知らせ…………… 11~12

江戸東京博物館友の会 平成27年度定期総会 記念講演(平成27年5月29日)

「浅草の今と昔を語る」

江戸東京博物館 竹内 誠 館長



浅草といえば「六区」を思い出される方が多いかと思います。私は子どもの頃、六区という字はどう書くのか分かりませんでした。戦後になって中学生の頃、片仮名の「ロック」なのかなと思っていましたが、その後、単なる数字の「六区」だと分かりました。

明治6年(1873)に太政官達で浅草寺の境内が浅草公園として指定されました。他にも上野の寛永寺境内は上野公園、芝の増上寺一帯は芝公園、深川の富岡八幡宮は深川公園、桜の名所の飛鳥山は飛鳥山公園として指定されました。

浅草の衰退から隆盛へ

浅草公園は六つに区分けされ、一区は本堂の辺り、二区は仲見世から雷門まで、三区は伝法院の敷地、四区は大池、ひょうたん池のあった辺り(六区の東側)、五区は本堂の後ろの奥山辺り、六区は新開地で湿地帯を埋め立てて造られたところです。後に仲見世を挟んだ両側の一帯が七区となりました。

浅草寺は平たんなところですが、

お寺は山と谷があることになっているため本堂の後ろの方を奥山と呼びました。奥山は、江戸時代、演芸など娯楽のメッカでした。芝居小屋、講談小屋、見物小屋などがあり、矢場、水茶屋もありました。大道芸の長井兵助は居合抜きを、松井源水は独楽回しを見せて人を集め、歯磨き粉を売っていました。楊枝を売る柳屋の「お藤」は江戸の三美女の一人で、大変な人気でした。11代将軍家斉、12代将軍家慶は、盛り場の奥山に行くのが大好きで、松井源水、長井兵助、手妻(てつま)といって手品をする芥子之助らの芸を見るのが楽しみでした。

明治になると奥山にあった演芸が新開地である六区に移り、当初は江戸の名残の芸が演じられていましたが、やがて活動写真ができて六区は様変わりします。さらに、オペラや喜劇も盛んになり、昭和3、4年頃にはトーキー映画が始まり大変な賑わいになりました。

しかし、昭和28年(1953)に相撲のテレビ中継が始まるなど、テレビで映画や娯楽番組が見られる時代に

なると、六区はだんだんと寂しい所になってしまいました。それでも仲見世通りだけは賑やかでした。

平成15年は江戸東京博物館の開館10周年にあたり、また、江戸開府400年にもあたるので、東京中を挙げて、江戸開府400年の記念行事が行われました。その結果、町おこしには粹な「江戸」の心が大切だということが認識されるようになりました。18代目中村勘三郎が江戸博にある中村座のような小屋で歌舞伎をしたいということになり、平成15年には奥山(浅草寺本堂裏広場)で仮設の劇場・平成中村座の公演を行いました。これに合わせて商店街も粹な和の空間を造るなどして、徐々に浅草の賑わいが戻ってきました。さらに平成17年にはつくばエクスプレスの浅草駅が開業、平成24年にはスカイツリーの開業があり、これらによって浅草が一段と賑わうようになりました。

三社祭は水上渡御の船祭り

江戸時代の三社祭は船祭り(ふねり)で、船渡御が行われていたことが分かって

いました。平成24年に三社祭700年祭で船渡御を行いました。一之宮には土師真中知命、二之宮には松前浜成命、三之宮には松前竹成命が祀られて三社様となり、それが神輿となって担ぐようになりました。神輿は3基のみで、各町内には神輿はありません。各町内からは山車や仮装した練り物が三社様の神輿に先行して出ます。神輿は、宮元三ヶ町といて材木町・花川戸町・山之宿町のみが一之宮、二之宮、三之宮を分担して担いでいました。

浅草寺の組織と運営

浅草寺は34の子院で構成されています。貞享2年(1685)に浅草寺の住職が追放され、東叡山寛永寺の支配下に入ります。元文5年(1740)には東叡山門跡自身が浅草寺の別当を兼務することになりました。そのため新たに別当代を設け、寛永寺の出先機関として実質的な浅草寺の総責任者として伝法院に住んでいま

た。浅草寺は賽銭の収入などを寛永寺に吸い上げられて経済的に苦しい状態になります。別当代を補佐する2人の役者(事務長)は入札で選ばれます。役者は、格の高い衆徒12カ寺の中から選ばれ、入札は衆徒12カ寺と寺僧22カ寺の計34カ寺で行います。これらほとんどの寺(子院)は、それぞれの境内に貸地があり、そこに合計で577もあった建家に5000人ももの町人が住んでいたという記録があります。浅草寺境内は参詣者だけでなく、住民も多い賑やかな場所であったことが分かります。

戦後の復興と境内の見どころ

昭和31年(1956)の浅草公園の地図を見ると、戦災で焼けた本堂が建設中になっています。本堂は鉄筋コンクリート造りで昭和33年に完成します。雷門は地図に記載されていませんが、昭和35年に松下幸之助の寄進により95年ぶりに復興再建されました。宝蔵門(仁王門)は昭和39

年に再建されました。浅草神社と二天門だけが江戸前期以来の建造物で、重要文化財に指定されています。

浅草寺本堂の裏には、江戸を代表する戯作者・山東京伝(1761～1816)の机塚の碑があります。この碑は、京伝の弟京山が兄を偲んで建立したもので、「九歳の時に寺子屋に入った際、親の買ってくれた机(天神机)を生涯愛用し、この机で百部を超える戯作を書いた。しかし五十年近くも使ったので、ゆがみ、古い込んださまは哀れである」という意味の文と、「耳もそこね あしもくじけてもろともに 世にふる机なれも老いたり」の歌が記されています。また、会津若松城下の戦争のさなか、敵味方の区別なく救護活動をしたり、孤児を救済するための施設や無料の病院をつくって福祉事業に一生を捧げた瓜生岩子(1829～97)の正座した銅像があります。

【記録】文・写真：広報部会・前田太門

第15回定期総会開催

多くの新任役員活躍に期待大!

5月29日(金)、定刻の13時15分から柏木さんの司会により友の会の定期総会が開催されました。畠中会長の挨拶から始まって、江戸東京博物館から参加された5人を代表して小林副館長の来賓挨拶。ついで議長団一議長に宮さん(事業部会)、副議長に早川さん(総務部会)、書記に光田さん(広報部会)、内山さん(事業部会)一を選出、議長から本日の出席数と委任状数の合計が888人で、定足数を超えているため総会は成立との報告があり、直ちに議事の審議に入りました。「第1号議案

▼新役員紹介



平成26年度事業報告ならびに収支決算報告」、「第2号議案 平成27年度事業計画案ならびに事業予算案」を各担当者が報告・説明、いずれも異議なく了承されました。事業部会は下永さん、広報部会は中村さん、総務部会は内匠屋さん、町方書上翻刻プロジェクトは新倉さん、会計は大澤さん、監査報告は松原さんです。26年度は館のリニューアル工事のために展示室や会議室の閉鎖があり、会員数や事業の参加者数が前年に比べ減少しましたが、27年度は2年前の数値を超える予定とい

う説明がありました。また、長年行っていた町方書上翻刻作業は全8巻の翻刻・刊行が完了、引き続き「総索引」の作業を年内に完成させる一方、新たに「館蔵古文書翻刻プロジェクト」を立ち上げる予定との報告が目を引きました。次に「第3号議案 役員および監事の選任」について畠中会長から候補者名が読み上げられ、異議なく了承されました。今期は任期満了などにより多くの役員が退任し、新任役員が10人となりました。役員、監事計15人が壇上に並び、紹介されると一人一人が一礼し、拍手のうちに閉会となりました。

15時から竹内館長による記念講演「浅草の今と昔を語る」、17時から7階「桜茶寮」で会員交流会があり、多くの人参加、賑やかな歓談飲食のあと散会しました。

【取材】文・写真：広報部会・福島信一

広重『名所江戸百景』 周辺探訪 —その12 (王子周辺)—



飛鳥山から音無川

見学会当日、架線柱倒壊事故により山手・京浜東北両線は集合時間になっても止まったままでした。そのため参加者は少ないだろうと予想しましたが、申込者182人中、参加者134人と7割強の方が来られました。地下鉄やバスを乗り継いで、JR王子駅まで駆けつけてくれたのです。

班分けが済んだ順に飛鳥山へ登りました。山上の3碑(船津翁碑、飛鳥山碑、桜賦碑)を巡るためです。なかでも飛鳥山碑は、8代将軍吉宗が桜を植え花見をしたことを記念して建てられたのですが、碑文が難解なため、「此花を折るなだろうと石碑見る」とか、「飛鳥山何と読んだか拝むなり」などと揶揄されました。

今は周りをビルに囲まれた飛鳥山ですが、広重の時代には、はるか向こうに筑波山が見えたようです。その様子を描いたのが「飛鳥山北の眺望」です。満開の桜の下を思い思いに散策し、ご馳走を食べ、踊り(かわらけ)に興じるさまが描かれています。



▲王子神社

飛鳥山を下りると、すぐ目の前は音無川です。この辺りは元来石神井川なのですが、紀州熊野から勧請した若一王子宮(後の王子権現社)の麓を流れているため、熊野本宮前を流れる音無川に因んで名づけられたといわれます。少し上流には幾つもの滝が流れ落ちていたので、滝の川とも呼ばれていました。この川を村境とする王子村と滝野川村の名称はそれぞれ若一王子宮及び滝の川に由来します。

若一王子は熊野三山に祀られる十二所権現(三所権現・五所王子・四所明神)中、五所王子の筆頭であり、本地仏は十一面観音、天照大神や瓊々杵尊(天照孫)と同一視されました。だから王子神社(権現)の祭神は今も天照一族、天照大神と両親(伊弉諾・伊弉冉)なのです。



▲金剛寺の雷神像

なお王子権現の境内には王子稲荷の別当も兼ねた金輪寺がありましたが、現在は稲荷の近く岸町へ引越しています。

音無川堰埭から滝不動

少し下流には水をせき止める堰埭(えんたい)がありました。これを描いたのが、「王子音無川堰埭世俗大瀧ト唱」です。世俗大瀧ト唱えられたとあるように、堰を越えて溢れ出た水が川幅いっぱい大瀧となって流れ落ちていました。

音無川沿いの遊歩道を道なりに進むと、間もなく正受院(赤ちゃん寺)です。かつて滝不動と呼ばれていたように、本堂裏から泉流の滝が滔々と流れ落ちていました。傍らの洞窟に不動明王が祀られてあったことから不動の滝と呼ばれていました。そのさまを描いたのが「王子不動之瀧」であり、ペロ藍で描かれた直線の滝は不動明王の剣を彷彿させます。

紅葉寺から装束稲荷

紅葉橋の手前を横切ると、紅葉寺と呼ばれる金剛寺があります。8代将軍吉宗の命によって楓が植えられたことに由来します。門前に松橋弁天の道標が残るように、境内に松橋弁天があります。この弁天と「王子

瀧の川」に描かれる岩屋弁天(実は吉祥天女)は混同されることも多かったようですが、今は岩屋の面影など全くありません。

滝野川橋を渡って対岸の遊歩道を音無川親水公園まで戻り、坂道を登ると王子権現(王子神社)です。ここまで来ると王子稲荷神社はまもなくです。

江戸に多いものたえを「伊勢屋稲荷に犬の糞」といいますが、関東稲荷の総元締めが王子稲荷神社です。今も広重の「王子稲荷の社」を彷彿させる境内ですが、一步外へ出るとやはり現代です。それでも金輪寺を経て名主の滝公園へ入ると、再び歴史の中へ迷い込んだようです。都内とは思えない静けさの中で、滝の音だけが静寂を破って響いています。

再び現代に戻って、線路沿いの道を「王子装束の木の木大晦日の狐火」に描かれる装束榎ゆかりの装束稲荷神社へ向かいました。大晦日の夜、関八州から集まった狐が榎の下で装束を改め、王子稲荷へ参詣したという伝承に基づき、王子の人たちは今も「狐の行列」を続けているようです。(参加費は、大人〈メーク共〉1,500円、子供500円)



▲装束稲荷神社

ここまでで今日の予定を終え、王子駅まで戻り解散しました。

参加者：134人。

【取材】文：広報部会・光田憲雄
写真：同・菊池真一
(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)



会員からの投稿

旧東海道(日本橋～生麦)を探訪して

中山 達雄

以前から、旧東海道を江戸の郊外まで歩いてみたいと思い、今回は起点である日本橋から横浜の生麦まで3回に分けて歩いてみました。以下、歩いた行程に沿って所感を記してみたいと思います。

- ① 日本橋～田町(薩摩藩蔵屋敷跡)～高輪(大木戸跡)～品川宿(8km)
- ② 品川宿～土佐藩下屋敷跡～鈴ヶ森刑場跡～多摩川(六郷渡し跡)～川崎宿(12km)
- ③ 川崎宿～市場一里塚～生麦(4km)

初回は、五街道の起点である日本橋からスタートです。まずは品川宿をめざして出発。しばらく歩くとJR田町駅近辺の三菱自動車工業本社(薩摩藩蔵屋敷跡)前に「江戸城無血開城会見の地」の碑がありました。

慶応4年(1868)3月、幕府側の勝海舟と官軍の西郷隆盛が江戸城の開城をめぐる度々わたって談判。ようやく無血開城にこぎつけた会見場です。幕末の二人の英傑の会談により、戦禍を免れた江戸を想うと感無量でした。そして東海道の入口だった「高輪の大木戸」(今はわずかに石垣の一部が残っているだけ)を通して品川宿へ入りました。

2回目は、品川宿から川崎宿へ向けて出発。土佐藩下屋敷跡から鈴ヶ森刑場跡へ。刑場は、八百屋お七などの放火犯が火あぶりの刑に処せら

れた形跡もあり、さすがに異様な雰囲気でした。当時は見せしめのために、あえて人目に付く東海道沿いに刑場を設けたそうですが、女性などは刑場の前を通るときは、目をそむけて通り過ぎたようです。そして多摩川(六郷の渡し場跡)へ。多摩川を渡るともう川崎です。

3回目は、川崎宿から横浜の生麦(生麦事件発生現場)へ。市場一里塚(ここまで日本橋から5里=20km)を経て、生麦へ到着しました。生麦事件は、文久2年(1862)8月、薩摩藩主、島津久光一行の大名行列に馬上散策をしていたイギリス商人が、誤って馬を乗り入れたため無礼討ちにされた事件ですが、周辺は当時の面影もなく、閑静な住宅街でした。近くのキリンビールの横浜工場で搾りたての「一番搾り」を飲みながら、150年前の事件に想いを馳せたとときでした。

針塚・筆塚・包丁塚など

どうめき 喜久男

小田急線と京王井の頭線が交差する下北沢駅の南口を出て、徒歩12、3分の所に浄土宗森巖寺がある。

門を入るとすぐ左に淡島明神のお堂があり、その右前に大きく「針塚」と記した石碑と、針を納める立派な石棺がある。案内板によれば、毎年2月8日または12月8日には針仕事を休み、折れた針や古針を豆腐やこんにゃくに刺して供養する習わしが古くから伝えられているという。森巖寺の針供養は毎年2月8日にここ淡島堂で行われ、豆腐に刺した針を僧侶が供養した後、抜き取って石棺に納められる。創始は不明だが、安政3年(1856)刊行の『狂歌江都名所図会』に森巖寺の針供養に因む狂歌が記されているから、それ以前からあったことは間違いなく、当時は江戸市民にかなり知れわたっていたらしい。ミシンのない時代、衣類の仕立てや修理に縫い針は必需品だったが、針は大切に取り扱い、粗末にしないように教えられていたのだろう。

浅草寺(浅草観音)の境内にも淡島堂があるが、その傍らに「魂針供養之塔」と記した大きな石碑がある。これは全国の和裁関係者団体が募金で建立した比較的新しいものである。

昔、寺子屋があった古い寺院の一隅に「筆塚」と記した石碑を見かけることがある。ペンや鉛筆がなく、筆記具といえば筆しかなかった時代、使い古した筆を捨てないで、縫い針と同じように感謝の気持ちを込めて筆塚に納めたのであろう。

上野不忍池の弁天堂境内には多くの石碑が立っているが、その中に、調理師組合による「包丁塚」や、「糸塚」「扇塚」などの石碑がある。変わった石碑では、商業協同組合や料亭などによって建立された「鳥塚」「魚塚」「ふぐ供養碑」「すっぽん感謝之塔」などがある。これらは生き物の命を頂いて生計を立てている人々が、懺悔と感謝の気持ちを込めて建立したものであろう。

昔から日本人は日用品や食べ物を粗末にせず、常に感謝の気持ちを持って大切に接する風習があった。物が有り余る現代に生活する人々にこの気持ちが失われていくのは、なんとも寂しいことである。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

4月14日(火)月番田中文彬さんが「志ん生てんこ盛り」と題して、所有する豊富な資料(音声テープ、DVDなど)を駆使し、様々なエピソードを交えながら「人間 古今亭志ん生」を紹介した。参加者20人。

5月12日(火)月番伊東敏男さんと東日本橋周辺の落語と地域の歴史にまつわる場所を巡る散策をした。取り上げた噺は「湯屋番」「宿やの富」「文七元結」「お神酒徳利」など。参加者14人。

◆藩史研究会

4月10日(金)大渡真司さんが「桑名藩の歴史」の発表を行った。関ヶ原後、本多忠勝により桑名藩が成立。その後、松平(久松)家、松平(奥平)家、

再び松平(久松)家と変遷した。本多家の築城と街づくり、久松、奥平両松平家の徳川家との関係や各藩主の業績について詳しく解説された。参加者17人。

5月8日(金)小関征三さんが「豊前小倉藩」を発表。毛利家(森家)の次に宮津より入封した細川忠興は愛妻ガラシャを手厚く葬ったセスペデス神父に感謝し、小倉に呼びキリシタン保護、全国有数のキリシタン都市となった。しかし神父の死後、弾圧の嵐が吹き荒れた。その後明石より小笠原家が転封、幕末まで治めた。徳川家との深いつながりを分かり易い系図で説明された。参加者19人。

◆古文書で『八丈実記』を読む会

4月9日(木)八丈島の島役人長戸路家に伝わる寛政4年(1792)の御用留(中)のP36~47を解説した。秋の収穫が天候不順で少ないと見込まれ、再度前借りを役所に懇願する源左衛門の手紙。参加者9人。

4月24日(金)同じくP48~56を解説した。幕府からの鯨漁や黄八丈の納税はできないかとの質問に対して答える手紙。参加者9人。

5月14日(木)同じくP56~64を解説した。3年間打ち続く飢饉に対する拝借金を願うが下知がなく、公儀救済を懇願する手紙。参加者7人。

5月22日(金)同じくP65~69を解説した。寛政4年7月、13人の新たな流人の島への到着や、島にいる3人の流人への見届物の受け渡しを代官役所へ報告する島役人の手紙。参加者9人。

◆『江戸名所図会』輪読会

4月16日(木)下永博道さんの担当。旧鎌倉街道、上の道は正慶2年(1333)の関戸合戦に関連する旧跡をたどれる「歴史と文化の散歩道」となっている。街道沿いには関戸古戦場跡、横溝八郎の墓があり、関戸6丁目の坂下から現多摩市役所への上り坂が沓切坂となる。参加者20人。5月21日(木)柏木融さんの担当。多摩市関戸の新大栗橋から川崎街道を東に行った桜ヶ丘CCのある連光寺地域は、赤坂台、平台と呼ばれて

いた。向の岡は多摩川を北に、西は関戸から東は現在の溝の口に連なる岡をいうとあるが、彼方に連なる丘を一般に向の岡と称していたようだ。参加者17人。

◆「落語で江戸散歩」をなぞる会

4月26日(日)『えど友』第50号10頁の「落語で江戸散歩⑨黄金餅」の前半部分をなぞって歩いた。JR上野駅に集合。西念の死体を運び出す出発点とされる元下谷山崎町から、この落語の間かせどころの道中言い立て(地名を順に言い立てる)にしたがって今の中央通りを銀座まで歩いた。参加者41人。

4月30日(木)1回目と同じコースを巡った。参加者38人。

5月21日(木)4月に引き続き「黄金餅」の後半部分をなぞって歩いた。前回の終点・銀座4丁目から、道中言い立てにしたがって、今の中央通りから銀座御門通りを右折、土橋、新し橋、愛宕山の下へ出て飯倉から永坂を下り、麻布十番、一本松坂等を経て絶江坂へ、そして曹溪寺まで歩いた。落語では麻布絶口釜無村の木蓮寺という架空の寺が終点だが、今回は絶江坂に由来の深い曹溪寺を木蓮寺代替りの終点とした。参加者34人。

5月24日(日)1回目と同じコースを巡った。参加者37人。

◆日本の大道芸伝承会

4月15日(水)深川江戸資料館で開催された「江戸の物売りと大道芸」の反省と次回の打合わせ。外郎売り、がまの油売りで発声練習をした後、南京玉すだれ等の練習。参加者3人。

5月21日(木)外郎売り、がまの油売りで発声練習をした後、南京玉すだれ等の練習。参加者3人。

◆江戸を語る会

5月2日(土)須賀靖さんが、日頃江戸(日本)について外国との比較、関連で考えていること「俳句は富士山、和食の次に世界遺産とならないか」、「ガリバーは江戸にもやって来た」、「皇女和宮の降嫁の様子をみて」等をテーマにして発表した。テーマ自

体が非常にユニークで興味深く、須賀さん独自の見解が表明されていた。これに対して参加者から反論や意見が続出し、盛り上がった会になった。参加者10人。

◆かっぱれの会

4月1日(水)かっぱれの入門曲として、端唄「奴さん」の曲からお稽古を開始。参加者3人。

4月15日(水)端唄「奴さん」をお稽古した。参加者3人。

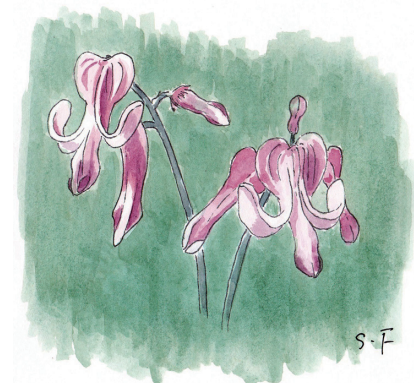
5月20日(水)端唄「奴さん」をお稽古した。参加者3人。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の2サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

友の会めも(開催日と人数)

平成27年4月~5月

◆役員会 4月14日(火)20人。5月12日(火)14人。◆事業部会 4月7日(火)24人。5月5日(火)19人。◆広報部会 4月21日(火)11人。5月19日(火)12人。◆総務部会 4月28日(火)20人。5月26日(火)19人。◆古文書講座 入門編：5月13日(水)午前87人・午後77人。初級編：5月20日(水)午前59人・午後53人。中級編：5月16日(土)午前40人・午後28人。◆町方書上翻刻プロジェクト 4月A・B共自宅作業。5月7日(木)A・B合同会議。14人。



▶コマクサ
イラスト：福島信一さん



「江島事件」と江戸歌舞伎

講師 ^{かの}菅野俊輔さん（歴史家 早稲田大学エクステンションセンター講師）

歴史的な事件である「江島事件」と日本の伝統文化である江戸歌舞伎、その歴史と文化の二つをクロスさせながらお話ししたいと思います。

江島事件

正徳4年(1714)正月12日、7代将軍家継の生母・月光院付の大奥年寄江島が、芝増上寺に代参に赴いた後、同じく上野寛永寺御廟に代参した年寄宮路と汐留にて合流、木挽町の山村座で芝居見物をし、役者などを茶屋に招いて酒宴になったことが発覚してしまいます。関係者全員に厳しい吟味が行われ、3月の裁定で江島は女性では一番重い「永遠流」になります。月光院の嘆願により「永預け」に変わりますが、月番老中は「遠流同前」とのことばを添えて信濃高遠城主内藤家に引き渡します。他の奥女中は江島に誘われただけということで「お構いなし」となり、江島一人が標的となっています。

関係者への処断

幕府老中たちは元禄以来、華美を極める芝居町の存在を苦々しく思っていました。この事件で芝居関係者、山村座の座元山村長太夫、役者生島新五郎と滝井半四郎、狂言作者中村清五郎はそれぞれ流罪、追放となり、山村座も廃座になってしまいます。江島の兄白井平右衛門は死罪、弟豊島平八郎は追放処分、江島と遊興を共にし、それを取りもった親戚・奥医師・旗本御家人など多くのものが遠流、追放となっています。水戸家家来奥山喜内は水戸家に預けられて打ち首になります。

芝居小屋への規制

正徳4年3月、中村座(堺町)、山村座(葺屋町)、森田座(木挽町)の三座に対して、幕府から芝居小屋に次

のような処置命令が下されます。2階3階の棧敷は1階に改めること、棧敷と楽屋・茶屋を結ぶ内証道の撤去、棧敷目隠しの簾は無用、雨天の節も狂言可能な屋根になっているが、^{こも}菰張りの簡易なものにすること、営業は七時半(午後5時)までとし、灯りを用いてはならない、つまり旧態の芝居小屋に戻せと命じています。

なぜ江島がターゲットに？

家康以来、4代家綱まで直系が続いていましたが、5代綱吉以降、分家から入った将軍が柳沢吉保や間部詮房などの側用人を使うようになり老中たちの意見が直接通らなくなっていました。それゆえ、幼将軍7代家継のいまを老中復権の機会と思っていたのでしょう。大奥で権勢を誇っていた江島は家継の生母付という立場にあったので、6代家宣の時代には手が出せなかったのですが、幼将軍となったのを好機として、一気に強硬手段に出たもので、江島はまんまと老中たちの術中にはまってしまったこととなります。

市川團十郎

江戸歌舞伎は、元禄の初代市川團十郎の登場以来、盛況となり、團十郎の荒事は京の坂田藤十郎の和事と並んで人気を博しました。團十郎は山村座と縁が深く、二代目團十郎は山村座で襲名披露をしています。江島は事件の前年、正徳3年4月に山村座で狂言「^{はなやかたあいごのさくら}花館愛護桜」を見物していますが、團十郎が助六を演じています。翌年山村座を訪れた江島の狙いは團十郎だったのかもしれませんが、11月の顔見世興行で座元と訴訟沙汰を起こした團十郎は、正月興行に出なかったため、幸いな結果

(町預け→御免)になります。

関係者の吟味の時、團十郎は2度も尋問を受けています。江島から近衛家(家宣の正室天英院の実家)の替紋^{ぎようようぼたん}香葉牡丹の下賜品を貰っていたことが問題となりますが、尋問した御役人が「團十郎家の替紋(定紋は三升)であろう」との粋なはからいがあった罪を免れたという逸話が、大正期の市川家に伝わっていました。

最後に

現在、12代まで続いている團十郎、今は海老蔵さんですが、前年冬に二代目團十郎が山村座とトラブルを起こしていなければ、正月も主役を務めていたはずでした。そうすれば生島新五郎ではなく、團十郎が事件に巻き込まれた可能性が高かった、そんな紙一重の話であり、事件だったと思います。このあと、江戸の歌舞伎は團十郎を中心として大きく発展していきます。團十郎のお家にとっても、後の歌舞伎ファンにとっても幸いなことでした。今から301年前にあったお話をさせていただきました。

レポーターからひとこと

大変歯切れの良い話しぶりでも面白い話が次々と披露され、限られたスペースではとても紹介しきれないのが残念です。江戸文化研究家から、歴史家として新たな一歩を踏み出された菅野先生、そのデビューを飾る講演でした。先生は、昨年BSジャパンの旅番組、女優^{あまの}杏さんの「杏が歩く！恋する東海道」、その第1回と第3回にも出演しています。京都までの旅は来年いっぱいまで続くそうです。

参加者201人。

【記録】文：広報部会・岡本 脩
写真：同・前田太門

歌舞伎の成立と江戸への伝播

慶長8年(1603)に出雲大社の巫女・お国が、「かぶき者」と呼ばれる若者たちが茶屋に通う姿を、自ら男装して表現し、「阿国歌舞伎」が生まれました。この舞踊が評判となったため、京都の遊女や女芸人がまねたものが群舞を中心とする「遊女歌舞伎・女歌舞伎」です。しかし、風紀を乱すという理由で寛永6年(1629)に幕府により禁止されました。代わって元服前の少年たちによって演じられる軽業などを採り入れた舞踊劇「若衆歌舞伎」が盛んになります。寛永元年(1624)の猿若座興行に端を発する江戸の歌舞伎は、この若衆歌舞伎の流れを汲んで発展したものです。これも承応元年(1652)に禁止され、翌年、前髪を落とした野郎頭にすることで、官能的な舞踊に代わって演劇の本道としての芝居を見せる「物真似狂言尽」を上演することを条件に歌舞伎の再開が許可され、「野郎歌舞伎」となります。

幕府の統制による野郎歌舞伎への変化に伴い、歌舞伎の演劇としての発展が始まります。まず、舞台上から女性役者が消え、女形の演技が模索されます。また、芝居としての構成が考慮され、多幕構成による続き物狂言が行われるようになります。こうして男性役者による筋の通った台詞劇としての形が整えられていき、元禄時代に歌舞伎文化が一気に花開いて、役者絵の成立へとつながっていきます。

役者絵の基盤の構築

浮世絵は市井の文化、中でも二大悪所といわれる遊郭と歌舞伎小屋の風俗と、そこに関わる人々を主なテーマとして発展していきます。浮世絵の創始者の一人、菱川師宣も江戸の地誌や芝居絵本に歌舞伎風俗を描いています。庶民に歌舞伎という娯楽への関心を促すために芝居小屋全体を捉える手法をとっており、役者個人の姿は注目されていません。

今日、一般に認知される「役者絵」の基礎は鳥居派の創始者・鳥居清信によって築かれました。清信は父・清元から絵看板や絵番付の作成を引き継ぎ、やがて役者の演技に注目して、役者一人の姿を絵看板や一枚摺

役者絵の成立と発展

講師 小林 優さん (足立区立郷土博物館専門員)

第152回 江戸東京博物館友の会セミナー

(平成27年5月23日)



の浮世絵として描くようになります。この背景には元禄期の初代市川団十郎による「荒事」の確立があります。清信は団十郎の力強い演技を表現するために「瓢箪足」と「蚯蚓描」という独自の表現技法を生み出しました。この技法は弟子の清倍によって大成され、役者絵の名門としての鳥居派の表現手法が確立されました。

やがて庶民の歌舞伎への関心は、演技の様式からプラス「見た目」に移り変わっていきます。写実表現への流れの中で、勝川春章は一筆斎文調と共に顔の相似性を高めた「似顔」の表現を市井に定着させます。また、楽屋での役者の姿を題材としたり、細判三枚続で舞台の様子を再現する表現を編み出す一方、多くの絵師を門下から輩出しました。これにより役者絵界の中心は勝川派へと移っていきます。

歌川派の登場

春章の没後に役者絵界の頂点に立ったのは、歌川派の祖・豊春の弟

子、歌川豊国でした。豊国は寛政の改革による歌舞伎界の低迷という時期に登場し、寛政6年(1794)に突如現れた東洲斎写楽を退け、さらに役者絵の教科書ともいべき『役者似顔早稽古』により歌川派様式による役者絵の一つの完成形を示しました。さらにこの絵手本にまとめた自身の画法・様式を弟子へ伝授することで弟子たちと共に大量の注文をこなし、門下から優れた絵師を多く輩出して、歌川派全盛の礎を築きました。自ら創出した技法には画面の奥行きを利用して、奥から手前へ、あるいは手前から奥へストーリーを展開させる「遠近法を利用した異時同図法」があります。また、寛政期頃より役者絵はいつそう庶民生活の中に浸透し、豊国の筆による宣伝広告としての役者絵なども現れるようになります。

国貞と国芳—幕末歌川派の全盛—

歌川国貞(三代豊国)と歌川国芳が歌川派の中心となっていく文化文政期以降、二枚続や三枚続の大画面に複数の役者を描いて芝居の様子を再現した役者絵が主流となり、役者単体を描く場合は半身像としての「大首絵」が目立つようになってきます。国貞が豊国形式による王道表現で役者を描き、様式美を高めたのに対し、国芳は洋風表現の導入や滑稽な表現など、版画技術と巧みな発想を縦横無尽に駆使して、新たな表現を追求しました。

浮世絵と歌舞伎の新たな関係

国貞や国芳の時代になると、彼らの作品が芝居の物語や演出に影響を与えるようになります。これにより、歌舞伎と浮世絵に相互作用の関係が生まれ、歌舞伎と浮世絵は密接な関係を保ったまま明治へとつながっていきます。しかし、歌舞伎文化を写す役割は、次第に写真や新版画へと移っていき、浮世絵の一ジャンルとしての役者絵は衰退していくことになるのです。

レポーターからひとこと

役者絵の変遷がとてもよく理解できました。また、博物館の活動内容と浮世絵コレクションについての詳しい解説もあり、小林さんの熱意が強く伝わってきました。参加者78人。

【記録】文・写真：広報部会・菊池真一

『江戸名所図会』の挿絵で 歩く江戸の町(2)



五月晴れの当日午後、東京メトロ、都営地下鉄九段下駅横の北の丸スクエア前に集合しました。



▲九段坂を歩く

中坂、九段坂、飯田町へ

九段坂下から少しの中坂の途中に築土神社があります。天慶3年(940)平将門を豊島郡に祀ったのが始まりです。拜殿横には世継稲荷が鎮座し、何代目かの橙が実をつけていました。九段坂へ抜けると北斎の牛ヶ淵の絵の碑があります。九段坂の名は、一説に急坂で九つの雁木があったからとか。坂上を右に進んだ角が武家屋敷の名残をとどめた瓦葺きのフィリピン大使館です。その石垣沿いに冬青木坂を下って目白通りに戻ります。挿絵には中坂の両側に武家地に囲まれた町屋が描かれています。家康入府の際、村人・飯田喜兵衛の案内に感心し、名主に任命、町名も飯田町とし、周りに武家屋敷が建ってもこの町人地は異例にも残り、地名は飯田橋として現在まで続いています。

堀留橋から三崎神社へ

目白通りを横断し滝沢馬琴宅跡の井戸に寄り道、南堀留橋を左折して堀留橋から桜の名所の遊歩道を歩きます。途中で讃岐高松藩上屋敷の庭



▲三崎稲荷神社

園跡説明板がありますが、遊歩道沿いの石のベンチは上屋敷土蔵跡の礎石を使っているそうです。あいあい橋を渡り三崎神社を目指します。創建は建久(1190~99)以前で和田倉にあったものが鎌倉時代は邸宅、江戸時代には講武所、近代では鉄道の建設のため移転を重ね、ここに遷座しました。挿絵の三崎稲荷社の右横側が現在は入口に変わり、小規模になっています。金比羅神なども合祀、旅の守護神として諸大名は参勤交代の帰りに無事を願い、土をもらってお守りとしたそうです。



▲水道橋にて

水道橋からお茶の水の碑へ

水道橋のたもとに同構図の銅版絵がありますが、挿絵に左の崖にサイカチらしき木々、右側に鰻屋、前方に懸樋、武家屋敷、左奥に富士山、両岸の絶景を見上げる遊覧客など描かれています。幹にトゲのあるサイカチが数本ある梟角坂を上ると神田上水懸樋跡の説明板があります。水道橋方面を振り返ると絵中の橋の位置、神田川の様子など今も同じで、川巡り遊覧は江戸時代から続いていたと気づかされました。お茶の水橋まで歩くとお茶の水の碑が交番に隣接していました。聖橋たもとのムクノキの古木には注連縄が張られて元宮と書かれ、かつて太田姫(一口)神社がありました。駿河台上の岩崎邸跡に建つ御茶ノ水ソラシティ前庭から、聖橋を挟んで湯島聖堂とニコライ堂が間近に臨めました。

筋違御門を大名行列が

昌平橋を少し行った万世橋駅跡に

筋違御門の説明版があります。挿絵には河岸や筋違御門、高札場、武家屋敷、勤番長屋、大名行列など描かれています。御門の前の火除け地は駿河台、日本橋通り、柳原など各方面に通じ、八ツ小路と呼ばれました。来日プロシア使節随員のスケッチ(万延元年・1860)は奇しくも挿絵とほとんど同じアングルになっています。筋違とは中山道と御成道が交差する意味からとのこと。

柳森神社から和泉橋へ

万世橋のたもとを右折し柳森神社に向かいます。道路(土手上)から急階段を下りると狛犬ならぬタヌキとキツネが出迎えてくれました。他を抜き(タヌキ)出世した將軍綱吉の生母、桂昌院が江戸城内に創建した福寿稲荷は開運の神として信奉され、後世ここに合祀されました。浅間神社、秋葉神社などたくさんの神社が合祀されています。挿絵には柳に囲まれた柳森稲荷、土手一帯に和泉橋まで続く柳の並木、河岸の荷揚げ場や矢場、松平定信が建てさせた初蔵、行き交う人々や大八車などが描かれ



▲柳森神社

ています。和泉橋の名の由来は神田川の北側に藤堂和泉守の屋敷があったため、などといわれています。3時間半歩き、川巡り船着場でもある和泉橋広場で解散しました。

参加者：135人。

【取材】文：広報部会・内匠屋京子
写真：同・佐藤美代子
(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(平成27年6月5日)

2015年 NHK大河ドラマ特別展 「花燃ゆ」



NHK大河ドラマ「花燃ゆ」の特別展が7月20日まで開催中ですが、その特別観覧会が6月5日(金)17時から行われました。

まず、1階ホールで担当の田原昇学芸員から杉文の生涯や、文が単に吉田松陰を兄に持ち久坂玄瑞と結婚しただけの女性ではないこと、近代における女性史の一側面を見せた人などのお話があり、その後展示室へ移動、実物を前に田原学芸員から分かりやすい説明がありました。

杉文は天保14年(1843)父・百合之助、母・滝の四女として誕生。安政4年(1857)、久坂と結婚。元治元年(1864)久坂、禁門の変で敗退し自刃。翌慶応元年、文は毛利家奥女中と

なり、名前を文から美和(美和子)と改称。明治9年(1876)姉寿の結婚相手、小田村伊之助(のちの楯取素彦)が熊本県令、ついで群馬県令に就任。明治14年、寿(楯取夫人)死去。明治16年に文、楯取と再婚。明治20年、楯取男爵に。大正元年(1912)楯取死去。大正10年、楯取美和子死去(享年79歳)。

プロローグ 文の育った萩

萩城天守閣の写真や伊能実測の測量絵図、毛利敬親の肖像などが展示されています。

第一章 兄・松陰と家族たち

文をはじめ家族・母や兄弟たちの写真や肖像画が展示されていますが、英雄でも後世に名が残るような人でもない貧しい庶民の人たちの写真がすでにこのような形で使われだしていた、ということが分かります。

第二章 兄の教えと松下村塾の仲間たち

当時の松下村塾という教育現場(表札や文机)を目の当たりにする展示、松陰が野山獄に入れられる直前に門下生一同と書いた「別宴寄書」など見るものが数多くありますが、圧巻は「吉田松陰自賛肖像」六幅です。これは松陰が江戸に護送される直前、久坂の発案で、肖像は門下生・松浦松洞が描き、自賛は小田村の依頼によったものです。当初は杉家と吉田家だけに書いたものでしたが、久坂たち4人からも強い要望があつて形

見として残ることになりました。

第三章 夫・玄瑞との別れ

展示場中央にデンと置かれた大砲(正式名：荻野流壱貫目青銅砲)は、下関戦争(馬関戦争)で戦利品としてフランスに接収されたものです。鑄造は天保15年(1844)ですが、兵器などの研究・製造はもっと早くからされていました。

第四章 幕府との対決へ

坂本竜馬が裏書きした薩長同盟締結文書や重文に指定されている徳川慶喜追討密勅文書など、このコーナーは激動する幕末が垣間見える貴重な資料が展示されています。

第五章 楯取とともに

歴史は英雄・豪傑だけが作るものではなく、地道な活動をした数多くの、今となっては無名の人たちの功績によるところが大きい、とは田原学芸員の言葉ですが、ほとんど知られていない杉文と結婚した楯取素彦もその一人です。楯取は群馬県令の時代に、赤字続きの富岡製糸場が政府により廃場と決定した際、その中止を求めて嘆願書を提出、撤回させた人でした。

文は楯取と結婚した後、育児院の幹事や貞宮御殿に出仕し、あるいは婦人会活動に貢献したりした近代的女性のはしりともいえる人だったのです。参加者73人。

【取材】文・写真：広報部会・福島信一

江戸博クリップ

「江戸時代の洋犬」

ボランティア事務局

杉山 祐子(すぎやま ゆうこ)

先日ある展示ガイドさんから見せられた江戸時代の絵草子。その中の挿絵で家の縁の下に座っている犬が、洋犬に見えるという疑問。江戸時代に洋犬? なぜ? という疑問。どれどれ。

メタボ犬が大半の現代とは異なり江戸時代は洋の東西を問わずボディはスリムと思われる。その点は共通。しかし描かれている犬は毛が違う。長めの毛でしかもややカールまでしている。江戸時代だから今のように洋犬が巷にいるはずはないのになぜか? 我が日本犬の特徴である短毛、三角の小さな目、長いマズル(口吻)がその犬には見られないではないか。洋犬にありがちなキュッとしまった

腰や大柄なぶち模様が見当たる。実はこのような洋犬の絵は江戸時代でも数多く見られる。江戸図屏風に描かれている犬もなんとなくバタ臭い。ズバリ洋犬図として描かれている絵も多く存在する。なんと『狗譜』なる洋犬図鑑も存在していた。ということは江戸時代にも洋犬は日本に存在したのだ。長崎からどうやら特権階級の贅沢品として輸入されていたらしい。

昨今の日本でも犬、猫、鳥、爬虫類などペット産業が急成長するほど大ブームだが、平和になっていった江戸時代の街には犬が増えたのだろう。当時は犬に対して一般的にペッ

トや飼い犬という愛玩的な概念はない。町犬、村犬など地域で面倒をみている里犬として養われていた。例外として鷹狩などに使われる猟犬がいたが飼い犬とは呼ばれず「手飼いの犬」と呼ばれていた。そしてごく一部だが武士が愛玩として飼う場合もあったようだ。このように犬が増えると全体的に混血化が進む。洋犬も日本犬とどンドン混ざっていったのであろう。かくして、明らかに洋犬の特徴を持つ犬(洋犬)の姿が絵に描かれるようになったのである。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

【日吉山王神社から清水坂】



日枝神社の神猿

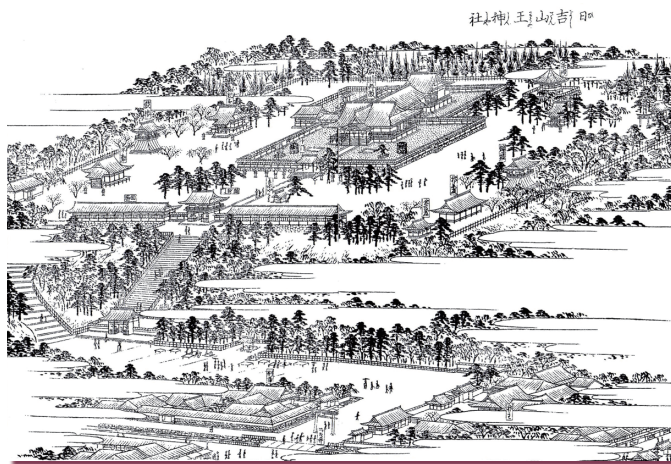
今回から中村貞子さんに代わり取材を担当することになりました。引き続きのご愛読をお願いいたします。さて、今回から巻之三、天璣之部に入ります。巻之三は現在の千代田区から始まり、東京23区南西部・川崎市・多摩地域に至る広範な地域を網羅しています。これから歩いていく範囲は「江戸とその近郊」という観点から明治初期の東京府の範囲とほぼ一致する東京23区内とする予定です。歩き始めは都心の桜が見頃を迎えた3月末でした。

日吉山王神社から貝塚

巻之三の名所歩きを「江戸名所双六」に例えれば「振り出し」は日吉山王神社(現・日枝神社)です。当社は徳川家の産土神ですが、御祭礼の山王祭は天下祭と称され、江戸市民に親しまれていました。今回は東京メトロ溜池山王駅から神社の裏手に回り、稲荷参道の石段を登りました。朱塗りの鳥居のトンネルを抜けた先に末社の山王稲荷神社があります。図会には古鰐口が「稲荷の祠に掛けてあり」と記されていますが、現在の社には掛かっておらず、社務所で確認すると宝物庫に保管されているとのことでした。満開の桜に彩られた拝殿前には狛犬ならぬ雌雄の神猿が鎮座しています。共に親しみやすい姿ですが、特に雌猿が小猿を抱えている様はとて微笑ましいものでした。

隨身門から正面の石段(男坂)を

下って左に折れると、忍城主成田下総守長泰の旧地跡に建つ衆議院第一議員会館の前に出ます。同所にあったという第六天祠の痕跡は見当たりません。議員会館の建ち並ぶ通りを北に向かうと、三べ坂の上りになります。岡部筑前守・阿部撰津守・渡辺丹後守の屋敷が周辺にあったことから名付けられたというのは実に洒落ています。青山通りを越えると貝坂通りに入ります。通りの途中からの上り道が貝坂ですが、坂のある麴町辺りの総名が貝塚であることからこの名がついています。図会では貝塚の由来について「さだかならず」としていますが、今日では貝塚古墳があったとする説が有力です。



▲長谷川雪旦 日吉山王神社

坂の途中で標示杭のある辻を右に入り、二つ目の角を右に折れると平川(平河)天満宮に出ます。ここの銅鳥居は天保15年(1844)造立で千代田区内最古のものだそうです。境内には常磐津節の岸澤右和佐の門弟により奉納された撫牛を初めとして石牛が5体もあり、実に壮観です。これだけ多くあるのは各地の天神様の中でも珍しいのではないのでしょうか。

村高山栖岸院から清水坂

再び貝坂に戻り、坂上から新宿通りを西へ向かいます。右手には図会で取り上げられた村高山栖岸院・常仙寺(寅薬師如来)・心法寺(千手観世音)が並んでいましたが、前の二つは移転し、心法寺だけが残っています。境内には塩地藏、延宝4年(1676)鑄造の銅製梵鐘、宝暦2年(1752)奉納の庚申塔などいろいろ

と興味深いものがありました。しかし、寺の説明板には本尊の木造阿彌陀如来坐像の記述はありますが、千手観世音については全く書かれておらず所在は不明です。天保9年(1838)に寺の建物が焼失しているので、この時に失われたのかもしれませんが。

門前近くの交差点を渡り脇道に入ると、上智大学(尾張徳川家中屋敷跡)沿いの下り坂になります。この坂から坂下辺りの一帯が清水谷と呼ばれていました。また、坂下からホテルニューオータニ(井伊家中屋敷跡)との間を右に上る紀尾井坂を図会では清水坂と記しています。尾張屋板切絵図では紀尾井坂と記されており、

当時は両方の名前が使われていたようです。清水谷の名の由来は近くの紀伊徳川家中屋敷内の湧き水によるもので、この地にあった「柳の井」が挿絵に描かれています。屋敷跡地にある清水谷公園には湧き水を復原した池が造られており、花見をする人の姿も見られました。

さらに公園前の紀尾井町通りを進むと、工事中の旧赤坂プリンスホテルのフェンス脇に「紀伊和歌山藩徳川家屋敷跡」の石柱がありました。すぐ横が弁慶橋で、橋の上から見る弁慶堀にも満開の桜が咲き誇っています。橋を渡って左の上り坂を少し行くと、赤坂御門跡の石垣が残っています。ここから先が富士見坂で、右手の衆議院議長公邸はかつての松平出羽守屋敷跡です。坂を上りきると三べ坂との交差点があり、この辺りに駒井小路がありました。現在その通りはなくなっていますが、切絵図から推測すると旧永田町小学校辺りではないかと思われます。ここの桜を「初歩き」の打ち止めとして、すぐそばの東京メトロ永田町駅に向かいました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：

広報部会・菊池真一
(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

古文書講座

9月から第2期を開講

9月から下記日程で開講します。受講は自動継続ではありません。改めてお申し込みください。また申込はがきは1講座ごととして、**申込の受付は7月末まで**です。

◆入門編

- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：9/2(水)、10/7(水)、11/4(水)

◆初級編

- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：9/16(水)、10/21(水)、11/18(水)

◆中級編

- 講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会非常勤職員)
- 開催日：9/19(土)、10/17(土)、11/21(土)

- 時間：各講座とも、午前か午後を明記してください。

午前の講座は10時30分～12時30分

午後の講座は14時～16時

- 会場：各講座とも江戸博1階会議室
- 定員：各講座とも80人(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

◆27年度第1期の残日程

入門編7/1(水)、初級編7/15(水)、中級編7/18(土)

【企画担当責任者】宮 俊(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展 「徳川の城 ～天守と御殿～」

◆徳川将軍家の築いた城、とりわけ天守と御殿に注目をしたと紹介されている特別展です。5月に終わった「大関ヶ原展」では、「大入袋」が出たほどの人気でしたが、本特別展も期待大なるものがあります。いつもの通り、担当の学芸員に「見どころ解説」をお願いしております。

- 開催日：8月9日(日)

17時～17時30分：見どころ解説

17時30分～19時：展示室自由観覧

- 申込締切：7月20日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室/1階特別展示室
- 定員：120人(応募多数の場合は抽選、会員のみ)
- 参加費：会員500円(当日払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

友の会セミナー

第155回「大相撲に見る江戸時代と変化」

講師 中村 史彦さん(相撲博物館学芸員)

◆江戸東京博物館のお隣の国技館では、場所ごとに多くののぼり幟がはためいて両国に華を咲かせますが、現在見られる大相撲の形式は、江戸時代中期から後期に定まったもので、土俵、番付、化粧廻し、櫓、太鼓、幟などが挙げられます。一方、明治・大正・昭和・平成と時代を経る中で、変わっていったところもあります。今回は、大相撲に伝わる江戸

時代の様式、そして江戸時代と現在の違いを、相撲博物館所蔵の錦絵と写真で比べながらお話していただきます。

◆講師略歴：なかむら・ふみひこ

平成7年、駒澤大学文学部歴史学科卒。日本相撲協会相撲博物館に採用となり、「柏嶋展」「相撲と芸術家」などの展覧会を企画。また、「相撲に見る伝統の諸相」「陣幕久五郎と横綱碑」、「資料から見る野見宿祢」と題しての講演も行う。相撲博物館の企画展の展示解説も分かり易く定評。

- 開催日時：8月22日(土) 14時～15時30分
- 申込締切：8月13日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

第156回「有力大名が造った一風変りな庭々」

講師 吉河 功さん(日本庭園研究会会長)

◆平安貴族から、中世の武家様式へと、建築・庭園様式も、変化してきましたが、江戸期以後は各地大名の屋敷や庭園がさまざまに花咲く時代になりました。昨年、吉河氏に「大変だった将軍の大名庭園見物」と題し講演をしていただきました。今回は、その大名が庭園主として庭を造るといふ視点からお話していただきます。絵図や古文書等も紐解きながら、珍しい庭園を紹介していただきます。

◆講師略歴：よしかわ・いさお

昭和16年(1941)生まれ。芝浦工業大学建築科卒業。専攻日本庭園・古建築研究。1963年日本庭園研究会を創立。研究誌『庭研』を創刊。古庭園の発掘・復元・管理等の他、日本各地、中国などで講座や講演を行っている。著書多数。

- 開催日時：9月12日(土) 14時～15時30分
- 申込締切：9月3日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

見学会

常設展(リニューアル)見学会

◆平成5年3月28日にオープンした江戸東京博物館は開館から22年を経て、初めて5、6階常設展示室がリニューアルされました。その常設展示室の日本橋や芝居小屋などの実物大の大型模型は、特に人気がありました。今回のリニューアルでは、新しいコーナーや模型、演出が加わり、さらにその魅力がアップしました。そのリニューアルされた常設展示室をもっと知って、その楽しさを味わっていただければと思います。

当日の常設展示室の案内は、展示ボランティアガイドにお願いしています。案内時間は、2時間ほどの予定です。

- 7月16日(木)14時集合
- 集合場所：江戸東京博物館・1階ホール前
- 申込締切：7月8日(水)必着
- 定員：50人 同伴者可(はがきに氏名連記)

- 参加費：無料（会員は会員証を忘れずに持参してください。同伴者は常設展観覧券を購入の上集合してください）
【企画担当責任者】 玉木達二(事業部会)

えど友研究発表会

第7回「えど友研究発表会」

- ◆今年も会員の皆さんによる研究発表会を開催いたします。演題については昨年と同様に2題を予定しております。会員の方が日頃の研究・学習を発表する機会となりますので皆様の多数のご参加をお待ちしております。
- 開催日：8月4日(火)13時～15時30分
- 申込締切：7月25日(土)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- 定員：100人 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員・同伴者とも無料
【企画担当責任者】 内山文伸(事業部会)

地域文化探訪・学習会

第8回(平成27年度 第1回)

板橋区立 郷土資料館を訪ねる

- ◆板橋区立郷土資料館は板橋区の北西部で埼玉県和光市に隣接するエリア(赤塚)に位置します。昭和47年に開設され、平成2年にリニューアルされました。区の歴史や生活・文化関連の資料展示をコンセプトにしています。常設展示では「生きる」「暮らす」「戦う」の3テーマを中心に、近郊農村地域のジオラマなどが見られます。また、館外では古民家や石造物も見学できます。この機会をお見逃しなく、是非ご利用下さい。
- 開催日：8月27日(木)13時30分～14時 受付
- 開催場所：板橋区立郷土資料館(板橋区赤塚5-35-25)
- 学習会：14時～15時30分
 - ① 館の沿革、特長などの講義
 - ② 常設展、企画展の見学(解説あり)
- 交通アクセス：都営三田線「西高島平」駅(「巣鴨」駅から約25分)下車徒歩15分程(他の交通手段省略)
- 申込締切：8月17日(月)必着
- 定員：60人 (会員のみ)定員を超えた場合は抽選
- 参加費：会員500円(当日払い)
【企画担当責任者】 清水昌紘(事業部会)

催事のお申込方法

- ◆普通はがきに、
 - ①催事名(略名可)・開催日
 - ②会員番号(必須)
 - ③氏名(同伴者連記)
 を明記して下記の「友の会事務局」へ。
- ◆申込は、催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。

会報<えど友>第86号

平成27年7月1日発行(奇数月1日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail: edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：畠中 勇(会長) 編集長：中村貞子
岡本 脩、佐藤幸彦、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、竹中祐見子、光田憲雄、大橋弘依
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910

会員優待のお知らせ

●2015年NHK大河ドラマ特別展 「花燃ゆ」

会期残り僅か
お見逃しなく!

- 会 期： 6月4日(木)～7月20日(月・祝)
- 休館日： 毎週月曜日(ただし7月20日は開館)
- 会 員： 一般670円、65歳以上340円、大・専門生540円
- 同伴者： 一般1,080円、65歳以上540円、大・専門生860円
*高校生は65歳以上と同じ。中学生以下は無料。
- (注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

次回予告

●特別展 「徳川の城 ～天守と御殿～」

- 会 期： 8月4日(火)～9月27日(日)
- 休館日： 毎週月曜日(ただし8月10日、9月14日、9月21日は開館)
- 会 員： 一般670円、65歳以上340円、大・専門生540円
- 同伴者： 一般1,080円、65歳以上540円、大・専門生860円
*高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
- (注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

企画展のご案内

●発掘された日本列島2015

会期残り僅か
お見逃しなく!

- 会 期： 5月30日(土)～7月20日(月・祝)
- 休館日： 毎週月曜日(ただし7月20日は開館)
- 会 場： 常設展示室 5F企画展示室

次回予告

●教育普及展(仮称)

- 会 期： 8月11日(火)～9月27日(日)
- 休館日： 毎週月曜日(ただし9月14日、9月21日は開館)
- 会 場： 常設展示室 5F企画展示室

- ◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館「友の会事務局」
- *「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。
- *お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
- なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。
- *いずれも申込多数の場合は抽選となることがあります。
- *「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の火曜日が金曜日(10時～12時、13時～17時)にお願いします。
- *「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加下さい。